

(前号からのつづき)

なくなったクレヨン



幼稚園の先生たちの講習会を開いたときのこと。折り紙でねこの指人形を折り、それを使って、一人一人お話を作り、みんなの前で発表しました。その講習会が終わった後、クレヨンが数本なくなっているのに気付きましたが、大勢で使っていたので、こういうこともあるかとあまり気にはしていませんでした。

これ、私のクレヨンや !!

ラフシーの幼稚園で、子ども達と絵を描くことになりました。先生が用意したクレヨンで、子どもとおしゃべりしながら絵を描いてあそんでいたとき…、ふと、1本のクレヨンに目が止まりました。何か見たことがあるなあ、んー、あれ？ もしかしてー。よく見てみると、そのクレヨンの半分破れた紙のカバーには、“さくら(クレヨン)”と日本語が…。さらに別の1本には、“JOCV(青年海外協力隊)”としっかり名前が残っていました。 **これ、私のクレヨンや !!**

「このクレヨン、どうしたの？」

「あー、それ、覚えてないの？ (覚えているから聞いているんだけど) 使ったろう、一緒に。」

「…」

「使ってそのまま持って帰ってきたのよ。」

「…」

「(返すの忘れてて)ごめんね」の一言を待ってみたけれど、その言葉はなく、なんだかいやな気持ち…。わざと返すのを忘れて、持って帰ってきたに違いない、きつと。

これが人ごとなら、クレヨン数本で大袈裟など感じるのですが、自分のこととなると、裏切られた気持ちになってしまうのです。これが全く関係のない人に盗られたなら、仕方ないで済ませたかもしれないけど、信頼している人に裏切られたショックは大きいのです。

あなたの物は、みんなの物

バヌアツ人との付き合いの中で、一番ストレスになるのが、物の貸し借り。この感覚が私達日本人とは、かなり違っています。

“あなたの物は、みんなの物”

自分が持っていないものを人に借りることは当然だし、持ち主に断らずに借りてもOK、そして、さらに、そのまま、ずっと返さなくてもOKなのです。で、でも、それって、“盗む”ことに限りなく近くない？ いいえ、違います、例え黙って持って行き、永遠に返さなくても、“借りた”と本人が思っていれば、それはあくまでも“借りた”ことになるのです。

村が一つの共同体、大家族で生活しているので、私達とは、物に対する感覚が違うわけです。

まあ、それで世の中、うまく回っているなら、いいでしょう。私がおちゃごちゃ口出しすることではありません。ここは、バヌアツ、あなたたちの国だから…。



From Vanuatu

バナアツだより

みなみのしまより

一宮保育園 高野 元美
(青年海外協力隊バナアツ派遣)

No.32

私が活動のベースにしていたロルタボラ幼稚園に、8才になる女の子が来ていました。名前は、フィーネ。フィーネはお母さんのお腹にいるときに、お母さんの体の具合が悪くなり、それが原因で、同じ年令の友だちに比べると、早く走れないし、おしゃべりもあまりできないし、数字や字を覚えることも苦手になったようでした。

バナアツでは、日本と同じように6才になったら小学校1年生になります、制度上は。でも実際は、親の判断で、5才で行く子どももいれば、7才、8才で行く子どももいます。フィーネも1年生になれる年令でしたが、親の判断で幼稚園に来ていました。

フィーネはおとなしい性格で、一人で遊んでいることが多かったのですが、友だちや先生がやっていることには関心を持っていて、楽しそうなことをしていると、いつの間にか側にきて、笑顔で興味深そうに見ていました。

子どもたちは、生まれたときから一緒にあそんできているので、フィーネがどういう子どもなのかは、よく知っていました。子どもたちにとって、フィーネはまさに“一人の友だち”でした。“一人の友だち”それ以上でもなく、それ以下でもなく、本当にただの“一人の友だち”でした。

1996年9月、フィーネのお父さんが突然亡くなりました。

バナアツでは、9月から最後の学期が始まります。この時、子どもの数が一番減ります。なぜなら、保育料を払えない、もしくは払いたくない親は、この時点で、子どもを幼稚園に行かせるのをやめてしまうのです。そのまま来なくなってしまい、それまでの未納分も踏み倒すというわけです。

そして、フィーネも来なくなってしまいました…。

お父さんが亡くなり、保育料が払える目途がたたないからという理由でした。残念ですが、仕方ありません。

「フィーネは、友だちと遊べなくなって淋しがっているんじゃないの？」

「そうそう、幼稚園の子どもたちが帰って来るの待ってるよ、お昼からは、みんな一緒に遊んでるよ」

とのこと。気になりながらも、それ以上私にはどうすることもできませんでした。

でも、私がそれ以上どうしようとも思わなかった本当の理由は、別に幼稚園に行かなくても、学校に行かなくても、フィーネはここで生きていけるからです。畑で作物を作り、料理ができ、ござやかごが編めれば、もうそれで十分生きて行けるのです。そして何より回りの人々は、フィーネのことを知っています。村人みんなが一つの家族のように助け合って生活しているこの村で、フィーネの役割があり、“場所”があるのです。

私が見る限り、知的な「障害」を受けた人が、大体、50人から100人程度の一つの村に、1人位いるようでした。人口の割には多いという印象を受けました。医療が十分ではないので、出産時に事故が起こりやすいのかもしれませんが、それぞれ、みんな、それなりの役割があり、それぞれの“場所”をもって、生きているように私には感じられました。

日本に“ノーマライゼーション”という言葉が入って来て、すでに10年の歳月が流れようとしています。日本とは全く社会がちがうので、比較することはできませんが、ペンテコスト島の人々の暮らしを見ていると、この言葉がむなしく感じられるのは私だけでしょうか。

フィーネが教えてくれたこと、それは、**その人のことを知っている** ということ、そこからスタート、それが一番大切だということ。



From Vanuatu

バヌアツだより

— みなみのしまより —

一宮 保育園 高野 元美
(青年海外協力隊バヌアツ派遣)

No.33

さて、今日は、久し振りにナツの話に戻しましょう。

島では、子犬のうちに雌は間引かれてしまいます。かわいそうですが、そうやって犬の数をコントロールしないと増え過ぎるからです。だから、島では、雄犬の数が圧倒的に多く、雌犬はたまにしか見かけません。

ナツはその数少ない雌犬の一匹。1997年4月、恋の季節を迎えました。

暗闇に光る目…

夜、トイレに行こうと外に出て、辺りを懐中電灯で照らすと、闇の中に、光る目があっちにもこっちにも。私が近付こうとすると、さっと逃げて行きます。雄犬たちです。犬は放し飼いなので、来たい放題。そして、ケンカ！ ケンカ！ そんな雄犬達の争いが続き、やっと、ナツの“彼氏”が決まりました。

それは、ベンジーという黒い大きな犬で、島の犬の中では、まあまあかっこいい犬。これで一安心、ゆっくり眠れるはず…。ところがどっこい、諦めきれないその他大勢の雄犬達は、すきあらばとチャンスを狙い、相変わらずうろうろしているのです。だから、ベンジーも片時もナツから離れることができません。

犬も人もみんな必死！

私は、ベンジーがナツと一緒に家の中にもいても全然かまわなかったのですが、回りのバヌアツ人は、よその犬がモトミの家に入り浸っているということが許せなかったようで、一日中、その他大勢の雄犬はもちろんベンジーも追い払おうと努力してくれていました。しかし、犬も必死です、石を投げられようが、棒でたたかれようが、お湯をかけられようが、頑張りつづけます。

私が仕事に行くとき、ナツも当然いつものようについてきます。ということは、ベンジーはじめその他大勢の雄犬もぞろぞろ — という訳です。これには、さすがに参りました。ナツ1匹なら、幼稚園の子どもたちももう慣れていましたが、何匹も犬が来たら怖いですね。これでは仕事にならないので、私はナツを連れて帰り、家に入れて鍵を **ガチャン！**



さあ、これで大丈夫と幼稚園に戻って、子どもとあそび始めると、「モトミ、ナツや！」と子どもたち。えっ？！ 見ると閉じ込めてきたはずのナツが、頭としっぽを垂れ、泣きそうな顔で小走りにやってくるではありませんか。 どうして～？
！

仕方がないので、またナツを連れて家に帰ると、割れたガラスが散乱していました。そう、ナツは窓ガラスを割って、逃げ出してきたのです…。家に閉じ込められ、どうしていいかわからず不安で、何とか外に出ようとして、ガラスを割ってしまったのでしょう。怪我しなくてよかった、かわいそうに、ごめんね、ナツ…。

その後も、雄犬達に網戸を引っかかれて穴だらけにされ、窓ガラスもまた1枚割られ、さらに回りのバヌアツ人の過激な犬退治が続き、私は疲れ果ててしまいました…

([次号](#)につづく)



No.34

(前号からのつづき)

ナツの“恋騒動”が少しはおさまってきたかなと思うと、今度は、ナツのお母さん・ボビーの番。アンルル村の眠れない夜はまだまだ続くのでした…。

切られた犬

ある日の夕方、いつものようにテクテク歩いて20分、パンを買いに行きました。焼き立てのパンを買い、店を出て、ふと気付くと、犬のフォスターがうずくまっています。どうしたのかなあとと思って見ると、何と、足を怪我しているではありませんか、しかも、骨が見えるほど大きな傷です。

「どうしたの、この傷？」

「ナイフで切られた」

「えーっ」

「マヌが切った」

「マヌって、うちのマヌ？」

「そう」

マヌというのは私の弟のこと、どうしてマヌが？ 私の頭の中でこの数日の出来事と傷付いたフォスターが結び付くのに時間はかかりませんでした。つまり、フォスターはナツやボビーを追いかけて来ていた犬の一匹だったのです。

本当にマヌがフォスターを切ったかどうかはわかりませんが、一連の騒動での怪我には間違いがありません。何の悪気もないのに、こんな目に合わされたフォスターが気の毒でかわいそうで、本当に申し訳ない気持ちになりました。

いったん家に帰り、自分の常備薬のなかから消毒液と抗生物質のカプセルを取り出し、フォスターのもとへ走りました。

フォスターに薬をあげたいと、フォスターの飼い主に断り、足の傷を消毒したあと、抗生物質のカプセルを半分飲ませました。ふと気付くと大勢の村人が私達を取り囲んでいました。

「モトミ、それは犬の薬なの？」

「どこで手に入れたの？」

次の日、フォスターの様子を見に行くと、薬が効いたようで、足の腫れがだいぶひいていました。ああ、よかった。でも、傷口は大きく開いたまま。本当なら数針縫わないといけませんが、ここには犬の足を縫ってくれる人はいないので仕方ありません。とりあえず1週間、この抗生物質を飲ませてみようと思い、毎日、夕方フォスターに薬を飲ませに行きました。

フォスターは日増しに回復し、1週間もしないうちに、傷口もだいぶふさがり元気に歩けるようになりました。この回復力、さすが、バヌアツ犬！

フォスターの飼い主は私に、

「ありがとう、もうちょっとで死ぬところだったのに元気になった。ところで、ナツが子どもを産んだら一匹くれないか。」

「いいよ」

「フォスターは、もう年寄りだから、新しい犬が欲しい。」

「じゃあ、フォスターはどうするの？」

「殺すよ、2匹はいらないから」

私は、バヌアツ人が、生命を粗末に扱っているとは思いません。人間が生きていくためには、他の様々な生命を分けてもらわなければなりません。そういう意味では、スーパーでパック入りの肉しか買うことのできない私達に比べると、日々、生命にふれながら暮らしています。だからこそ、動物はあくまで動物なのかもしれません。愛情を持ってしまうと食べることはできませんから。

でも、犬はちょっと違うんだよ…。 ナツが家族であり、親友であった私にはショックな言葉でした…。



From Vanuatu

バヌアツだより

みなみのしまより

一宮保育園 高野 元美
(青年海外協力隊バヌアツ派遣)

No.35

出産

犬の妊娠期間は8週間。1997年6月2日、ナツは5匹の子どもを産みました。子犬たちは、すくすく育っていきました。子犬を欲しいと言ってくれる人も多く、すぐに子犬たちの行き先も決まり、私とナツは、子犬たちと過ごす残り少ない日々を楽しんでいました。

ある夜のこと…

その日は、早朝から、村人総出で、遠くの畑にでかけていました。暗くなっても帰って来ず、私は一人でご飯を食べ、静かな夜を過ごしていました。夜9時を回ったころ、トラックの音がして、急ににぎやかになりました。途中でトラックに拾ってもらって、帰ってきたようです。外では、しばらくワイワイガヤガヤ言っていました。私は迎えには出ず、部屋で友だちに手紙を書いたりしていました。

次の日の朝、外に出ると、ナツと子犬たちがうれしそうに足にまとわりついてきます。**あれ、一匹少ないなあ、どこ行ったんだろう。まあ、どこかで遊んでいるんだろう**とあまり気にもせず、仕事にでかけました。

いなくなった子犬

午後、仕事から帰ってきて、その子犬の姿はありません。そう遠くへ行くはずはないので、村の中を名前を呼びながら探してみましたが、どこにもいません。夕方、畑から帰って来たお母さんに、子犬がいなくなったと話しました。すると、

「ああ、昨夜トラックで帰って来たろう。トラックの運転手が子犬が欲しいって言うから(トラック代の代わりに)あげた。」

と、あっさり言われてしまいました。

ガーン！

そりゃあ、いつか子犬たちとはお別れしないといけないんだけど、元気でねって、お別れぐらい言いたかった…。

私がショックを受けた様子を察したお母さんは、「私は止めたのよ。モトミの犬は持っていったらダメだって。でも、暗くてよくわからなかったから」と、バヌアツ人お得意の言い訳(なぐさめ?)を始めました。しかし、そんな言い訳で、私の心がいやされるはずもなく、ナツと共に悲しみにくれています。(ナツは別に気にしていなかったかもしれないけど)

こんな風の子犬たちと別れるのは、もういやだと思い、子犬を人にあげる予定を少し早めることにしました。そうすれば、きちんとお別れも言えるし、新しい飼い主に、かわいがってあげてねと頼むこともできるから。

そして、子犬たちはもらわれていき、最後に残った1匹は、サント島にいる日本人の友だちにあげることにしていました。

([次号](#)へつづく)



No.36

(前号からのつづき)

ナツの子どものうち最後に残した1匹の首には、ギンガムチェックのかわいいリボンを巻き、これは飼い犬であるという“しるし”としました。

ある日、私は、遠くの幼稚園に泊まり込みで巡回に行く予定があり、トラックを待っていました。頼んでいた時間を1時間過ぎても、2時間過ぎても、来ない… 来ない…。まあ、こんなことはいつものことなのでもう驚きません(腹は立つけど)。仕方がない、明日の朝早く出発しようと、その日はあきらめました。次の日の朝、夜明けとともに、出発。当然ナツも一緒です。トラックで行くのならナツを置いていくけど、歩いて行くとなるとついてきてしまいます。ナツが行くなら、子犬も連れて行こうかなとも思ったけど、やっぱりやめて、ボビーとその子ども達と一緒に留守番してもらうことにしました。

今日の目的地まで、てくてく歩いて4時間。
途中、数人の若者に会いました。

「昨日、ここでトラックの事故があったんだよ。トラックがひっくり返って、乗ってた人達みんな放り出されて、大怪我した人は飛行機でサントの病院にまで運ばれた。」

「えっ、本当？ トラックって、誰のトラック？」

「ドロのトラック。」

「ええー！！」

そう、その昨日事故ったというのは、私が待っていたトラックだったのです、どうりで来ないはず…。来なくてよかった。

やっぱり自分の足で歩くのが一番安全！ 确实！

さて、それから3日後、巡回の仕事を終え、私は家に帰って来ました。帰りももちろん歩いてね。バヌアツ人に、

「何でトラックで帰らないんだ？」

「いいことだ、トラックは金の無駄遣いだからな。」

「モトミは太り気味だから、運動になっていいよ。」

とか言われながら…。

いない…

帰って来てみると、いないのです、首にギンガムチェックのリボンをつけた子犬が…。しまった…。

3日間留守をされていて、帰って来るや否や、犬がいない、犬がいないと大騒ぎしていたので、みんな心配そうに集まってきました。村人が言うには、ある夜、盗まれたということ…。

ガーン！

それから、会う人会う人に、子犬が盗まれた、探していると訴え、言いふらしました。大きな木の根っこに座っていたところを拾われたとか、夜、道に出ているのを連れて行かれたとか、誰その家の台所にいつの間にか来ていたとか、たくさんの情報が寄せられました。最初は真剣に聞いていましたが、どうも、どの話も当てにならないことに気づき、もう、あきらめました。

子犬が盗まれたのは、トラック代の代わりに持って行かれた時よりも、ショックだったし、盗まれたということは、裏切られた、誰のことも信用できないという気持ちにもつながってしまいました。でも、子犬を一匹残して、3日間も家をあけた私とナツがいけないと言え、いけないので、自業自得かなとも思ったり、ナツの子どもをめぐる出来事は、何だか後味悪く終わったのでした。



From Vanuatu

バヌアツだより

— みなみのしまより —

一宮 保育園 高野 元美
(青年海外協力隊バヌアツ派遣)

No.37

私がバヌアツで暮らせるのは、1997年12月まで。ここを去るといことは、ナツともお別れ…、そう思うと淋しくて、また、ナツがかわいそうでたまりませんでした。

でも、日本に連れて帰るのは、簡単なことではありません。狂犬病ワクチン接種、検疫の書類作り、飛行機の予約、経由地の滞在許可、オリの購入、日本側の通関・検疫との連絡、検疫中の業者(犬の世話をしてくれる)の手配など、それはそれは大変な手続きが待ち受けているのです。しかも、私は電話もファックスもないという非常に不便な所にいるわけですから。さらに、ナツの場合、帰国2カ月前頃、次の発情を迎え、帰国時に出産という計算にもなります。



ナツを連れて帰るのは無理だろうと、ずっとあきらめていたのですが、帰国の日が近付いて来るにつれ、やはり離れがたく、だめでもともと、やってみようと思いを立ちました。

まず、動物検疫所の獣医さんに相談してみようと電話。しかし、応対に出た職員は

「(日本に犬を持ち込むなんて)できません。」

と一言。大きな衝撃！ **ガーン!** でも、待てよ、こんなに即答するということは、この人は本当はそのことに関しては全然知識がなくて、適当に言っているに違いない、ここで諦めてはいけない、とりあえず、獣医さんと話さなくては…。でも、結局、獣医さんも、よくわからないとのこと。まあ、それは仕方ない、自分でもっと調べてみなくてはと思い、まずは、狂犬病ワクチンを受けたいことを伝えました。ところが、バヌアツに今、狂犬病ワクチンはない、正確に言うと、あるけど、有効期限が切れているとのこと。で、オーストラリアから取り寄せてもらうことに。でも、いつ届くかは、???

次に、航空会社に行き、犬を日本に連れて帰りたいと相談すると、空港の貨物係のところに行きなさいと言われ、一路、空港へ。その貨物係の事務所というのが、わかりにくく(小さい空港なのに)、さんざんたらい回しにされ、もうだめだ～と泣きそうになっていたとき、一人の警備員が声をかけてくれました。

「何かお力になりましょうか」と。

事情を話すと、「ああ、それなら」と、あっさりと連れて行ってくれ、とりあえずは、ホッ…。

その事務所に入ると、頼りなさそうな、にやけた若い男性職員が一人。ああ、だめかもしれない、と失礼ながら、その人の顔を見て思ってしまう。日本に犬を… と話すと、分厚い本を出して来て、にやけながらも一応調べ始めました。しかし、それを調べる間、明らかに私用電話とわかる電話が何度もかかり、その度長々としゃべり続け、ああ、一体いつになったら…。待ちくたびれ、私が自分でその本を手調べた結果、どうやらまずは、経由地であるオーストラリアはシドニー空港の滞在許可が必要であることが判明。しかし、どこにどうやって連絡を取ればいいのかも、わからないのでした。

そして、私は、ペンテコストに帰り、考えていました。どうしよう、連れて帰りたいけれど、あまりにもわからないことが多すぎる、先へ進めない、どうしよう、どうしよう…。

悩みながらも、ある夜、私は決意し、タイプライターに向い、シドニー空港の滞在許可を取るための手紙を書きました。そして封筒には、

動物検疫所

シドニー空港 オーストラリア

とだけ記し、投函しました。

([次号](#)へつづく)



No.38

(前号からのつづき)

さて、ナツの日本行きにあたり、もう一つ大きな仕事がありました。それは、ナツの避妊手術。帰国2ヵ月前に発情、帰国時に出産では、日本への長旅はとても無理。ナツと私の暮らすペンテコスト島に獣医はいないので、首都もしくはサント島に飛行機で行かなければなりません。

手術の予約をしようと、数週間前から何度も電話しますが、いつも獣医さんは不在。応対に出た職員は、「OK、伝えておくから」「予約はできている」と言ってくれます。でも、私は直接獣医さんと話さないことには安心できないと、何度も電話するけれど、いつも留守という状態が続いていました。

出発前日、もう一度確認の電話をしました。すると、「今、獣医は出張でいないけど、明日帰って来る」とのこと。明日の何時に帰って来るのかと聞くと、朝だと言います。何となくいやな予感。でも、その言葉を信じるしかなく、私とナツは飛び立つことにしました。

昼過ぎの飛行機で行き、次の日の朝、手術という予定だったので、今日の夜は何も食べさせてはいけないかもしれない、だから、お昼にいっぱい食べさせておこうと思ひ、いつもは食べさせていないお昼ご飯をたっぷりナツに与えてしまいました。それが、悲劇の始まりだったのです…。

空港に行き、「今日はナツと乗るよ」とナツを抱いたまま、体重計へ。バヌアツの飛行機は、乗る前に荷物はもちろん、人間の体重も計ります。「犬も乗っていいよね」と一応聞いてみると、乗ってもいいけど、箱に入れてくれと言われてしまいました。しまった、聞かなければよかった、箱なんて持ってないし、第一ナツがかわいそう。「ふーん、わかった」と私はあいまいな返事をし、心の中では、そのまま抱いて乗ってしまおうと決めていました。

ナツ、飛行機に乗る！

さて、いよいよ飛行機がやって来ました。みんなの注目を浴びながら、ナツを抱き、私は機内へ。空港の職員も、私がナツを箱に入れず、そのまま抱いて乗っているのを気付かないふりをしてしてくれていました。ラッキー。パイロットも黙認してくれているようです。

いよいよ離陸。20人乗りの小さい飛行機なので、離着陸の振動、音はものすごいものがあります。飛行機が加速を始めると、ナツは驚き、私のひざの上で大暴れ。幸いナツは、番犬として活躍するとき以外は全く吠えない犬だったので、暴れてもワンともキャンとも言いませんでした。

目的地に着くまでには、合計6回の離着陸があります。その度、ナツはかわいそうに怖がっています。次第にナツの息づかいが荒くなり、汗をかき、よだれがだらだら出てきます。そのよだれの量がすごくて、私の服はびしょびしょになってしまいました。

そして、ついに、3回目の離陸の直後、生暖かい感触が…。同時にすごい臭いが…。そう、ナツは酔って吐いてしまったのです。昼ご飯をたっぷり食べさせて来たので、それはもう悲惨…。私の服がどろどろに汚れてしまったのはもちろん、その匂いはまたたく間に狭い機内に充満。回りのバヌアツ人たちは、手や服で鼻と口をふさぎ…。大ひんしゆくとなったわけです。

目的地に着くと、乗客は誰一人私に声をかけることもなく、逃げるようにそそくさと降りて行ってしまいました。私はしばらく動けないまま、ナツにこんなしんどい思いをさせてしまった思いと、回りに迷惑をかけてしまった申し訳なさと、本当に困ったときには誰も助けてくれないんだという世間の冷たさなどで途方にくれていました。

空港の職員も、外国人が犬と共に悲惨なことになっているのに驚いた様子。水道の所で、汚れを落としていると、どうした、どうしたと空港の職員、パイロットが集まって来て、色々質問してきます。私は、心身共に疲れ果て、恥ずかしくて、見られたくないし、聞かれたくないけれど、みんなは、もちろん、そんなことはおかまいなし…。

さあ、気を取り直して、今度はいざ獣医さんの所へ。

しかし、いやな予感は的中。朝帰って来ているはずの獣医さんは、まだ帰って来ていません。明日の朝、帰って来るとのこと。ほんまかいなと思いつつ、もう来てしまった以上、待つしかありません。

次の日の朝、いやな予感は的中しつつも、張り切って獣医さんの所へ。しかし、まだ…。今日の午後、帰ってくるという…。よくないパターン、本当にいやな予感。

「私はわざわざペンテコストから来たのよ。前々から予約してあるのに、どういふことよ！」

と言うと、

「午後1時には帰って来る。電話するから」

と、またその場限りのいいかげんなこと言うのです。でも、ここで怒って居座っても仕方がないので、また、出直すことにしました。

午後2時、約束の時間が過ぎてもやっぱり電話はなく、こちらからかけると、「午後4時に帰って来る」と…。ああ、これはもうだめだ、この調子では明日もあさっても帰って来ないかもしれない、仕事もあるのに、どうしよう…。でも、しょうがない、ここは、バヌアツなのだから。

午後4時過ぎ、電話がなりました。

「獣医が帰ってきた！」と職員がうれしそうに話します。「ほら、僕の言ったとおりでしょ」と言わんばかりです。私はナツと獣医さんの所に飛んで行きました。

獣医さんに、今すぐ手術してくれないか、明日の飛行機でペンテコストに戻りたいと話しましたが、やはり、それは無理で、明日の朝一番にしてもらうことになりました。

次の日の朝、いよいよ手術です。ナツは、自分がこれからどんな目に遭うのか知るよしありません。ナツ、ごめんね、しんどいかもしれないけど、これも日本と一緒に帰るためだから、これからもずっと一緒にいられるためだから…。

手術は無事終え、10日後に私が自分で抜糸をすることになりました。ペンテコストに帰る飛行機は今日の午後。ナツはまだ眠っています。獣医さんに相談したところ、本当は安静にしておかないといけないけど、まあ大丈夫だろうとのこと。どうしようかと迷いましたが、思い切って帰ることにしました。

段ボールに眠っているナツを入れ、トラックに乗り込み、空港へ。飛行機を待っている間、ナツは少しずつ目を覚まし始めました。そして、そのまま飛行機へ。離着陸の時は、やはり驚き、一生懸命起き上がろうとしますが、まだ麻酔が効いているため、上半身を上げるのがやっと。ナツには、しんどい思いをさせたけれど、今回は、暴れることも吐くこともなく、私は少しほっ…。

ペンテコストに帰って来て、空港から家まで、ナツはまだ歩けないので抱いて帰りました。ナツの体重13キロ、背中のリュックが10キロ。重いよお～。



ふうー。やっと帰って来たあ。家にたどり着いて、一番ほっとしたのは、ナツでしょう。嵐のような3日間、お疲れさまでした。



No.39

([今までのつづき](#))

帰国2カ月前、首都にある協力隊の事務所から、「犬が日本に行ける許可が出た」と突然無線連絡が入りました。至急、空港の貨物係まで連絡するようにとのこと。一体何がどうなったのかよくわからないまま、次の日、あのにやけた頼りにならなそうなお兄さんに電話をしに行きました。

すると、何と私がオーストラリアの検疫所あてに出した手紙([No.37](#))の返事が来た、つまり、バヌアツから日本への経由地・シドニー空港でのナツの滞在許可が下りたということだったのです。やったあ、あんないいかげんな住所で届いたんだ！ しかも、すぐ返事をくれるなんて、感謝、感激、やっぱりオーストラリア！ バヌアツとは違う！

これで、日本に帰れる！

その頃、すでにナツの飛行機用のオリも日本の業者に注文して、送ってもらっていました。あとは、狂犬病のワクチン接種。

その後すぐ、獣医さんにも電話をかけてみましたが、ワクチンはまだ届いていないとのこと。外国から犬を日本に持ち込む場合、1カ月前までに狂犬病のワクチン接種をしていたら、検疫所で最低2週間様子を見た後、開放されます。しかし、狂犬病のワクチン接種をしていない場合、2～3カ月検疫所で預かれてしまうこととなります。そうすると、犬のストレスはもちろんですが、その間に犬の世話を業者に頼まないといけないので、その費用もおそろしくかかってしまうのです。

ワクチン届く！

帰国1カ月前、最後の望みをかけて、獣医さんに電話。

「届いてるよ。いつでもおいで。」

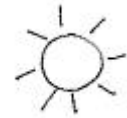
やったあ！

「あさって行きます」

と私は興奮気味に答え、そのまま空港に行って、あさっての飛行機の予約をしました。

帰国2週間前には、私は、このペンテコストを引き払い、首都に出て、ビスラマ語と日本語の最終レポートを仕上げる予定になっていました。つまり、あさって、首都に出て、ワクチン接種をすまし、とんぼ返りでペンテコストに帰って来て、2週間後、最終的にここを去るという慌しい日程になってしまうわけです。ナツを連れて、首都とペンテコストを2往復…、前回のこと(吐いた)があるので、気が重くなってしまいます。

そこで、私は、首都からボートで10分ほどのイフィラ島という小さな島に住んでいる友だちにナツを預けることを思い付きました。イフィラ島は、島の直径が200メートル位しかない、とてもとても小さな島。車は1台もありません。回りは海に囲まれているので、ナツもどこにも行きようがありません。犬を預けるのには絶好の場所。私は、そう確信しました。しかし、その確信が、取り返しのつかない不幸を招くことになってしまうのでした。



出発前日、夕方、ナツと海に水浴びに行きました。こうして、ペンテコストの道をナツと歩くのも今日が最後かと思うと、込み上げてくるものがあります。2年間、いろんなことがあったね。こうして楽しく過ごせたのも、ナツ、お前がいてくれたからこそだよ。ナツがいてくれて良かったよ、ありがとう。



と、感慨にふけりながら歩いていると、私の20メートルほど前を歩いているナツに、石が飛んできたのを、私は見逃しませんでした。数人の若者が前から歩いて来て、そのうちの一人がナツに石を投げ、慌ててすぐ脇の林に隠れるのが見えました。

「誰が投げたの？」と聞いてみても、

「投げた奴は隠れたよ」とみんな笑います。

最後の日なのに、どうして、どうして、人の気持ちを踏みにじるようなことをするのか？ その若者達とすれ違った後、ぼろぼろ涙がこぼれます。そんな私をナツは不思議そうに見上げているのでした。

ナツは、水浴びが嫌いで、自分から海に入ったことは、とても暑い日に一度あるだけで、いつも、私に抱かれて、無理矢理に入れられていました。ちなみに、ナツは生まれて以来、一度も石鹸で、真水で、体を洗ったことはありません、いつも海ですませます。

明日、首都に行くんだから、少しはきれいにしとかなないとね、とナツをなだめすかし、水浴びをさせました。しかし、いつものことながら、水浴びのあと、ボビーと一緒にそこら中転げ回って遊ぶので、せっかく水浴びしたけど、ちっともきれいになりませんでした。まあ、仕方ない。

さて、次の日、ナツと共に空港へ。ナツは、日本へ行く準備があるから、もうこのままペンテコストには帰って来ないと話すと、「ナツは動物園に入るのか」と言う人もいました…。えっっ？！

誰もそんなにナツとの別れを惜しんでくれる人はいませんでした。私の面倒をみてくれているお母さんだけは、日本に行くのかあ、元気でね、さようならとナツをなでて声をかけてくれました。ありがとう。

今日は、前回の失敗から学び、朝から水以外何も食べさせず、飛行機に乗り込みました。しかも、ナツが入れる大きさの段ボールを用意して。もちろん、ふたはしないけどね。

幸い座席が空いていたので、ナツの入った段ボールを椅子の上において乗ることができました。今回は、ナツも少しは落ち着いている様子。でも、結局、吐いたんですけど。

首都に到着。まずは、空港の貨物係のあのにやけたお兄さんに会いに。シドニーからのファックスを見せてもらい、滞在許可がちゃんと下りていることを確認。そのにやけた頼りなさそうなお兄さんが、急に神様に見えました。そして、ナツの飛行機の予約を入れてもらいました。

よし、これで、日本に行ける！

次に獣医さんの所へ行き、狂犬病ワクチンの接種と健康診断を受け、検疫用の書類も作ってもらいました。これで全てOK！

そして、その夜、前述のイフィラ島へと渡ったのでした。

次の次の日、私だけ、ペンテコストに帰ることになりました。友だちが、ボートが出る砂浜まで、ナツと見送りに来てくれました。私がボートに乗り込むとナツはとても困った様子で、ボートに近付こうとするけれど、波が来るので近づけません。そう、ナツは海が嫌いなのですから。

しかし、ボートのエンジンがかかり、ボートが砂浜を離れ始めると、何とナツは、海に自ら足を踏み入れました。その顔は、泣いています。涙なんかももちろん出るわけではないけれど、泣いています。待って！ 待って！ おいていかないで… と。そして、どんどん体は海の中に入り、ついには泳いで追いかけて来るではありませんか。

ナツー！！

ごめんね、ごめんね、でも、帰ってくるから。2週間したら、絶対、迎えに来るから。そしたら、ずっとずっと一緒にいられるんだから。

ボートを追いかけて泳ぐナツを友達も心配そうに見守っています。どこまで追いかけて来るのか心配しましたが、波が高いので、少し泳いただけであきらめて、砂浜へ引き返していきました。ああ、おぼれなくて良かった…。とりあえずは、ほっ…。まあ、私がいなくなれば、友だちのことを頼りにおとなしく待っていてくれるだろうと、まだ私は気楽に考えていました。

一人ペンテコストに帰り、お別れのパーティや行事、荷物整理に追われていました。朝、ドアを開けると、いつもそこに寝ているナツがいない、幼稚園でいつも私の後ろに座っているナツがいない、いつも一緒に歩いていたナツがいないことは、やはり淋しくて、一緒に帰って来ればよかったなあと思ったものでした。でも、ナツは、もっともって淋しい思いをしてるだろうなあ、私が2週間たったら、迎えに行くことも知らないんだから。見知らぬ土地で、しょんぼりしているだろうなあ。元気なのかなあ。

それから10日後、そのイフィラ島の友だちから無線電話が入りました。「言いにくいことなんだけど…」
最初の一言で、私は全てを察しました。

ナツがいなくなったんだ…。

友達が言うには、友だちが首都へ出掛け、帰って来てみると、ナツの姿がなく、すでに3日帰って来ていないということでした。友だちが出掛けるときは、ボートを追いかけて泳いだりはしなかったということでした。友だちは、島のどこかに隠れているのかもしれないから探してみると言ってくれました。

私は、その時、**ナツは死んだ… と直感的に感じました。**

あの時、一緒にペンテコストに帰って来ていればと、いくら後悔しても、もうどうしようもないのです。私はなんて甘かったんだろう、どうして、もっとナツの気持ちを考えてあげなかったのだろう。

すぐにでも飛んで行ってナツを探したかったけれど、3日後に幼稚園の先生たちと子どもたちが開いてくれるお別れパーティがあるので、そうもいきませんでした。

それから、5日後、私はペンテコストにさよならしました。荷物整理が大変で、最後までばたばたし、またナツのことが心配で心ここにあらずの私でしたが、やはり、家族、特にお母さんの顔を見ると涙が止まりません。

「私には、娘がいなかったから、モトミが娘になってくれて、本当にうれしかった」と。

ありがとう、本当にありがとう。こんなわがままな外国人を2年間も面倒みてくれて、本当にお疲れさま。みんな元気でね。

滑走路を飛び立つとき、ああ、これで終わりなんだ… と思いました。もうここに帰って来ることはないんだ… と。

ありがとう、忘れない、絶対に。ありがとう。

と、そんな気分浸っていたのもつかの間、飛行機は風にほんろうされ、大揺れ。ハア、やっぱりここはバヌアツだ～。

([最終号](#)へつづく)



No.40

([これまでのつづき](#))

ペンテコストを引き払い、首都に出て来てから、ナツ搜索大作戦を開始しました。まず、ナツがいたイフィラ島内を、名前を呼びながら歩き回り、それから、ナツの似顔絵入りのポスターを作りました。そして、会う人会う人に、ナツを見かけなかったか、聞き込みをしましたが、ナツの足取りはつかめないままでした。

海に飛び込んだナツ

そのまま数日がすぎ、それでも私はまだ望みをもって、ナツを探し続けていました。しかし、ある日、

「ある人が、(友だちの)家の前にいたナツに石を投げると、ナツはそのまま砂浜まで走って行って、海へ泳いで行った」

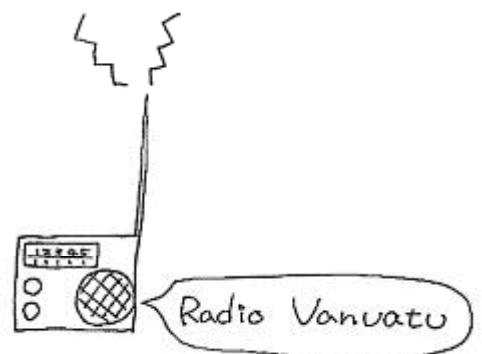
という話を聞きました。ナツにとって、逃げるところは、私が去って行ってしまった海しかなかったのです。まさか… と思っていたことが、現実のこととなってしまいました。

その砂浜から泳いだとすると、約1キロほど先に、イリリキ島という島があります。そのさらに数百メートル先が、首都の街・ポートビラです。ナツが泳いだ可能性があるなら、イフィラ島の中だけ捜してもいけないと思い、ラジオ放送で呼びかけることにしました。

ラジオを使って

バヌアツでは、通信網が発達していないため、冠婚葬祭や荷物を送ったから受け取ってとか、会議の連絡などのメッセージを流すラジオ番組があるのです。それを利用することにしました。

ラジオ局に行き、原稿を渡し、料金を払い、友だちの家で、夕方5時30分からの放送を聞いていました。



「子犬をさがしています…」 と私が頼んだメッセージは始まりました。ちょっと待てよ、ナツは子犬じゃないよ、立派な成犬です。勝手に言葉を変えるなよ～。犬がいなくなった、イコール、子犬と勝手に解釈したらしいのです。

その放送が終わった後、電話へと走り、メッセージに間違いがあったと言いました。すると、

「みんなもう帰ったから、明日の朝にしてくれ」とのこと。

「明日の朝、何時？」

「7時半。」

「でも、朝のメッセージ番組は、7時半から始まるから、間に合わないでしょ」

「間に合うよ。少し早く来たら」

そりゃあ、私が早く行くのは構わないけど、そっちが、誰も来ていなかったら話にならないでしょ～。と思いつつ、仕方がない、明日の朝行くしかありません。

次の日の朝、7時10分ごろ、ラジオ局に到着。しかし、受付に人はいません。でも、朝6時から、ラジオ放送は始まっているので、誰かはいるはずと、うろうろしていると、アナウンサーを発見。事情を話すと、快く昨日の原稿を探し始めました。ところが、ないので、私の原稿が…。

「(原稿が)ないから、もう一回書いて」と紙を渡され、書き始めました。その時点で、すでに7時25分。放送開始まで、あと5分。

一生懸命書いている私の横で、そのアナウンサーが、「どこに住んでるの?」「仕事は何?」とうるさく質問してきます。私が、生返事をしていると、何回もしつこく聞くのです。ああ、もう、静かにして。自分が私の邪魔になっていることに全く気付いていない様子で、

「時間がないから、急いでね」

なんて言うのです。もう！！

放送開始、数十秒前に何とか書き終え、アナウンサーはそれを持って、放送室に走って行き、放送を始めました。ああ、間に合った…。

ラジオもやっぱりバヌアツだ

ところで、バヌアツのラジオには時報がありません。あの段取りの悪さでは、とても無理そうです。日本の放送局では、0.1秒たりとも、時間が狂うことはありませんが、バヌアツでは、7時のニュースが7時5分から始まったり、前の日のニュースのテープを間違えて流したり、放送が突然中断して沈黙が続くこともたびたび。そう、ラジオ局の中さえも、バヌアツ時間が流れているのです。

海に消えたナツ

その日の夕方、ラジオを聞いて、一つ情報が寄せられました。それは、1週間ほど前、砂浜に打ち上げられている犬を見たというものでした。その犬は、色が白で、赤い首輪をしていた…と。つまり、ナツの特徴と一致する訳です。打ち上げられていたという砂浜も、もし、ナツが泳いだとすれば、流されていく可能性が高い場所でした。

そして、結局、寄せられた情報はその一件だけでした。

ナツはバヌアツの海に消えていった…。

私がこよなく愛した青い海、皮肉にも、私の愛したナツはその海へと消えていきました。どこかで元気に暮らしてるよ、となぐさめてくれる人もいるけれど、私の心の中では、ナツはあの青い海へと消えてしまいました。

ナツ、ごめんね、本当にごめんね。
帰りたいかったらうね、ペンテコストに。
一緒に帰りたいかったね。
ごめんね、ごめん…

たかが犬、されど犬。私にとっては、一番信じられる友であり、家族であったナツ、死んだらもう会えない、そんな当たり前のことが、頭の中をぐるぐる回っていました。

ナツがいなくなったこと、それは、日本から来て、そして帰っていく私への、バヌアツの“抵抗”のようにも思えました。バヌアツからの最後の厳しい贈り物だったのかもしれない。

何でもお金を出せば手に入り、物にあふれている国から来た私。バヌアツで、素朴な暮らしをしてみました。それは、それで、素晴らしいものでした。今まで気付かなかったことを、たくさん気付かせてくれました。素晴らしい暮らしだ！と認めながらも、でも、やっぱり私は帰って行くのです、日本へ。

彼らの暮らしを素晴らしいと言えるのも、私が、わずか2年しかそこにいない“旅人”だったからかもしれません。そんな私に、バヌアツは、何かを伝えたかったのかもしれない。

日本に帰って来て…

そして、私は日本に帰って来ました。そして、今、また保育の仕事にたずさわっています。バヌアツの人々、自然、そしてナツがくれたもの、それを大切に大切にため、子ども達に伝えていくことで、バヌアツとナツへの恩返しをしたいなと思っています。

ペンテコストのみんなが、バヌアツの海が、空が、そしてナツが見守っていてくれる…、そのあたたかさを感じます。

“いろんなところへ行って
いろんな夢をみておいで
そして
最後に君のそばで会おう”

ありがとう、そして、さようなら。



☆ あとがき ☆

バヌアツだより、長らくお付き合いありがとうございました。多くの方々に、楽しみにしていると声をかけていただき、うれしく思うと同時に、しっかり書かなくてはというプレッシャーも感じつつ、何とか、ここまで来ることができました。

先日、職員の異動の内示があって、来年度も、私は、一宮保育園に勤務（[編注：1998年3月現在の状況です](#)）することになり、うれしく思っています。バヌアツで得てきたことを、来年度はもっと積極的に子どもたちに返していきたいと思っていますので、楽しみにしていて下さい。

2年前の夏、中南米ニカラグアを旅し、帰国後、赤痢に感染していることが発覚し、皆様にご迷惑、ご心配をおかけしたことがありました。今更ながら、改めて、おわび申し上げます。

そして、私が病気になったことで、途上国は汚い、行ったら病気になるという偏見を少なからず広めてしまったことは、ニカラグアはもちろん、世界中の途上国と言われる国の人々に大変申し訳ないことをしたなと思っています。

これからも、私は、旅をするでしょう。また、海、川、山と自然の中へ出掛けて行くでしょう。その中で感じたことを、もっともっと伝えていけたらと思っています。

本当にありがとうございました。 **ボンギー！**

1998. 3. 24